

ヘーブス・シーズ
平和や命の大切さをいろん
な視点から捉え、広げていく
「種」が「ヘーブス・シーズ」
です。世界中に笑顔の花をた
くさん咲かせるため、小学6
年から高校3年までの49人
が、自らテーマを考え、取材
し、執筆しています。

花は、戦争で苦しんだ人たちの
平和への願いも私たちに伝えま
す。第2次世界大戦時に若くして
命を奪われたユダヤ少女を思つ
て生まれたバラは、国境を越えて
育ちます。広島市では、長崎の被
爆医師ゆかりのバラが成長を続け
ます。そんな花々人々が託した平和
への思いを取りました。ジュニア
ライター自身も、平和の大切さ
をじっくり考えました。

第11号

キヨウ
チクトウ

広島市の花



キヨウチクトウへの
思いを話す緒方さん
(広島市中区)

花は、戦争で苦しんだ人たちの
平和への願いも私たちに伝えま
す。第2次世界大戦時に若くして
命を奪われたユダヤ少女を思つ
て生まれたバラは、国境を越えて
育ちます。広島市では、長崎の被
爆医師ゆかりのバラが成長を続け
ます。そんな花々人々が託した平和
への思いを取りました。ジュニア
ライター自身も、平和の大切さ
をじっくり考えました。

児童が育む平和の願い

カンナ



カンナを育てる基町小の児童

広島市中心部の川沿いや公園などに
あるキヨウチクトウ。赤や白の花を咲
かせます。「70年間(75年間とも)草
木も生えない」と言われた原爆投下直
後の広島でいち早く咲き、市民を勇氣
づけました。そんなキヨウチクトウを題
材にした絵本があります。

『夾竹桃物語』は、被爆したキヨウチクトウの語る
体験談が一人の少年の心に届く、とい
う内容です。原爆で犠牲になったのは
人間だけではありません。「未来を支
える子どもに一つ一つの命の重みを絶
本で伝えたかった」。作者の弁護士、

緒方俊平さん(68)〔東区〕は話しま
す。被爆して燃えるキヨウチクトウの前
を通りがかった大が、自分も重傷なの
に川へ入り、ぬれた体を振つてキヨウ
チクトウに水をかける場面がありま
す。お互いが心を通い合せ、助け合
う大きさを伝えます。

焦土の広島でたくましく花を咲かせ
たキヨウチクトウ。緒方さんはこの花
を見ると、「おまえは強く生きている
か」と説教をされているよな気持ち
になるのです。色鮮やかな花や強い
生命力に、私も勇気づけられます。平
和な世界への希望を感じます。

永井博士のバラ 被爆医師の祈り伝える

自身も被爆しながら被爆者
治療に当たった長崎の医師、
永井博士(1908~51年)
ゆかりのバラの木が、広島市
中区の平和通り緑地帯にあ
ります。

鮮やかな赤い花を咲かせる
「レッド・ラジアンス」とい
う品種。高さ約1mの2株が
並びます。元は、永井博士宅
の庭に咲いていました。広島
と長崎の青年が広島市で平和
交歓会を開いた49年、病床の
博士から贈られました。1株
話をします。



永井博士ゆかりのバラについて
ジュニアライターに話す桧山委員長

毎月第2、第4木曜日に掲載します。

ジュニアライターが取材後の感想をつづった「編集後記」を、中国新聞ヒロシマ平和メディアセンターのウェブサイト (<http://www.hiroshimapacemedia.jp/?p=45374>) で読むことができます。

花に託して

戦災復興 希望の一輪



咲き誇る花を前に、植え始めた当時を
振り返る小林さん(福山市のばら公園)



福山市の花

バラ



助け合い 住民の絆紡ぐ

福山市が「ばらのまち」となったのは、
1956年、当時空き地だった現在のばら
公園(花園町)に、市民が約千本を植えた
のがきっかけでした。45年8月8日の空襲
で市街地の8割が焼け野原となり、復興す
る中での出来事でした。
背丈ほどの草がぼづぼづうに生え、女性や
子どもが通るには危ない場所でした。草を
刈るだけでは再び元に戻ると考え、きれい
な花を咲かせるバラを植えました。住民が
12区画を分担し、競い合うように大切に育
てきました。

毎日バラを見て、対話するように世話を
した。水がほしいのか肥料がほしいのか
分かるようになつた。植え始めた一人、
福山ばな会名譽会長の小林幹弥さん(90)は
愛情を注いで育てる大切な話を話します。「住
民が一緒に育てることで、お互いの絆も深
めることができます」

「毎日バラを見て、対話するように世話を
した。水がほしいのか肥料がほしいのか
分かるようになつた。植え始めた一人、
福山ばな会名譽会長の小林幹弥さん(90)は
愛情を注いで育てる大切な話を話します。「住
民が一緒に育てることで、お互いの絆も深
めることができます」

小林さんと一緒にばら公園に行きました
花も咲き、バラ咲く街に住めるもろ
いと」。小林さんが詠んだ短歌です。「バ
ラを育てることで、命の大切さも学んでほ
しい」と願います。バラは平和への思いを
温かく発信していました。

(中3岡田実優)

バラの植樹のため、現在のばら公園に集まつた
住民たち

(1956年3月、小林さん提供)

1956年3月、小林さん提供)

世界中で日記が読み継がれ
るアンネ・フランク(1929~45年)第2次世界大戦の悲
劇の象徴といえるホロコースト(ユダヤ人大虐殺)により、
15歳の若さで命を落としました。彼女をイメージしたバラ
が、福山市のホロコースト記念館で育てられています。

赤、オレンジ、ピンク…と、花は咲き始めから終わりまで
の間に色を変えます。生きる
希望にあふれ、ますますきれ
いになろうと、思いを残し
たまま散るかのよう。隠れ家
生活を余儀なくされ、強制収容所に入れられても前向きな
気持ちを捨てなかつたアンネ
の姿と重なります。生きる
「まるでバラの感情が表れ
ているみたい」。同館の学生

田聖悟君(11)〔福山市〕は

「平和への関心が広まってほ
しい」と期待しています。

アンネのバラ 前向きな姿 国境越えて



アンネのバラの世話をするスマール
ハンズのメンバーたち

このバラは、アンネの日記
を読んで感動したベルギーの園芸家が作りました。家族の
中でただ一人生き残った父オ
ットーさんから1972年、尾道市〔はそう感じていま
す〕はそう感じています。

このバラは、アンネの日記
を読んで感動したベルギーの園芸家が作りました。家族の
中でただ一人生き残った父オ
ットーさんから1972年、尾道市〔はそう感じていま
す〕はそう感じています。

モルハンズの御幸小6年吉

田聖悟君(11)〔福山市〕は

「平和への関心が広まってほ
しい」と期待しています。

「平和への関心が広まってほ
しい」と期待しています。